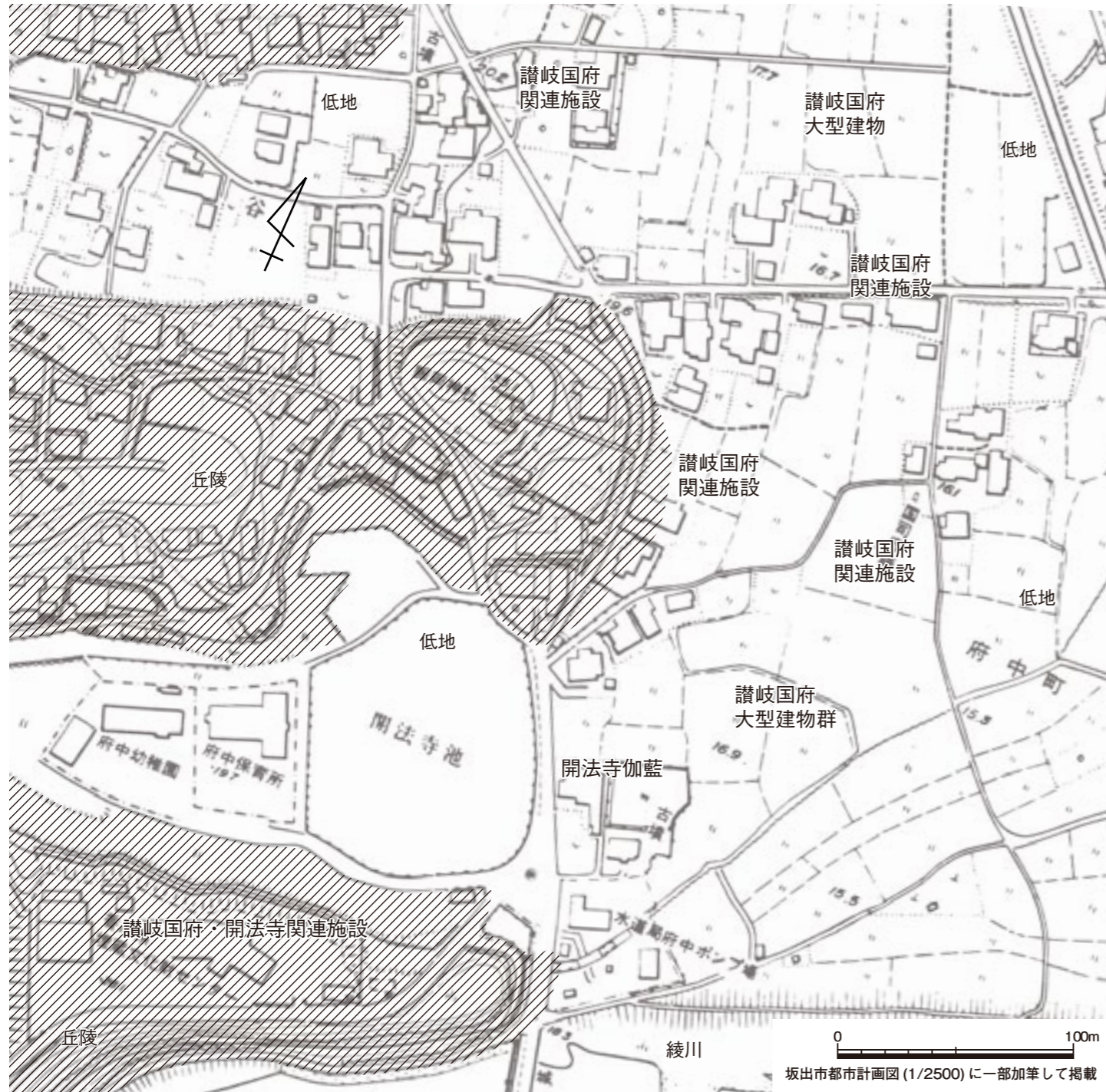


讃岐国府や開法寺の施設は、開法寺池の東側から北側にかけて確認されてきましたが、今回の調査によって開法寺池南側にも広がる事が分かってきました。

4・5区の溝(9世紀)や柱穴(10世紀末～11世紀前半)は、讃岐国府や開法寺が存続していた時期に築かれています。そのため、いずれも讃岐国府や開法寺に関連する施設の一部と考えられます。丘陵の尾根上でも大きな溝や奈良時代以降(8世紀～)の須恵器・瓦などが確認されており、讃岐国府や開法寺を営むうえで、この丘陵が広く利用されていた可能性もあります。



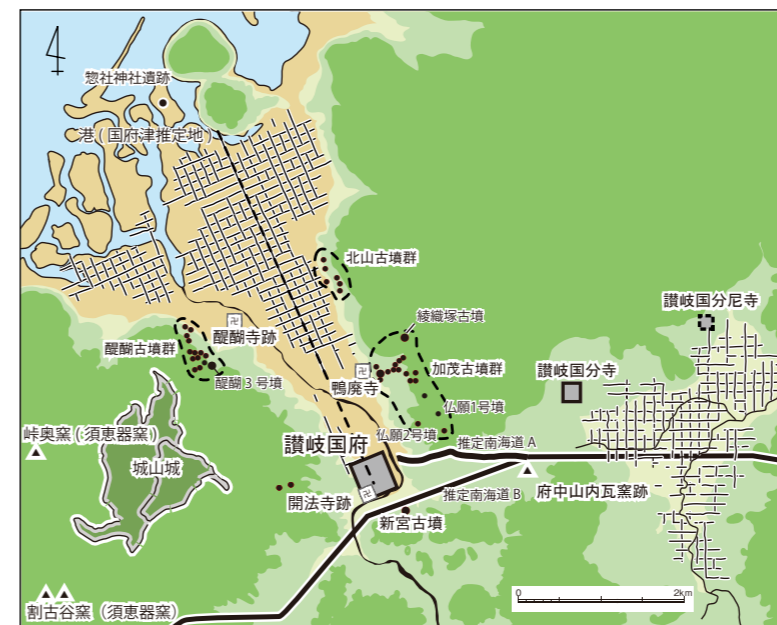
讃岐国府・開法寺の施設推定配置図

香川県坂出市府中町

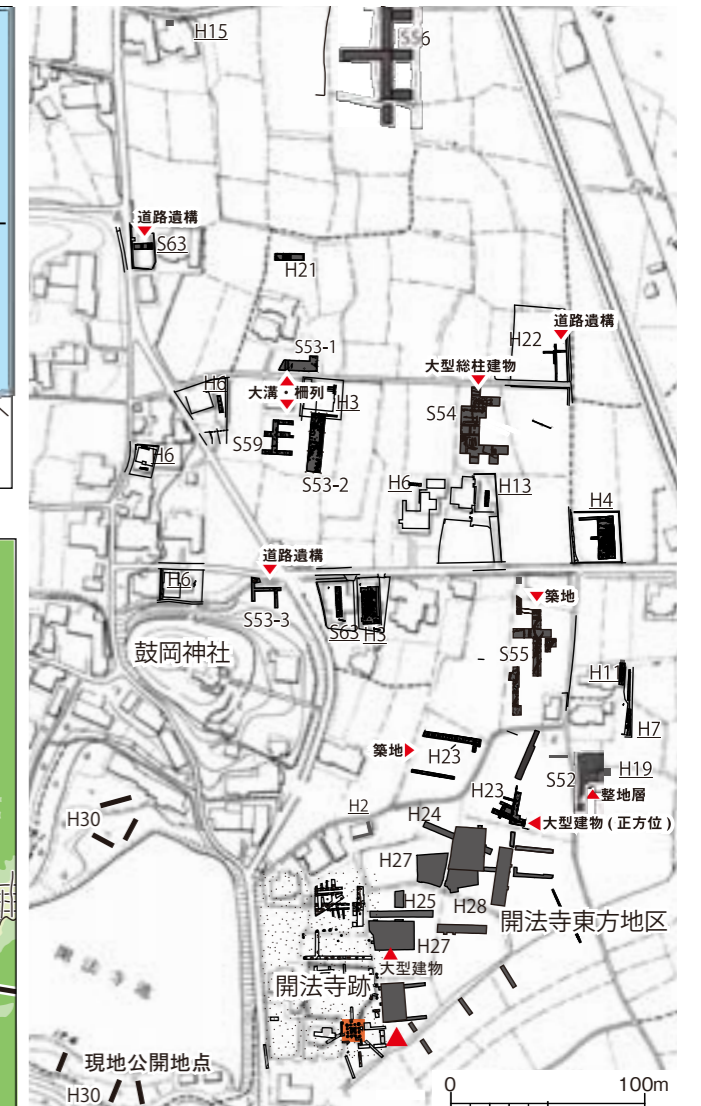
讃岐国府跡調査事業に係る発掘調査



讃岐国府の位置



讃岐国府周辺の歴史的環境



坂出市都市計画図(1/2500)を縮小し、一部加筆して掲載
讃岐国府跡の発掘調査地点と代表的な遺構

讃岐国府とは

国府とは、奈良時代(約1300年前)の古代国家の成立とともに、地方統治の中心として国ごとに置かれた役所で、現在の都道府県庁のような施設です。讃岐国府は、奈良時代から鎌倉時代(約700年前)にかけて機能し、菅原道真(845～903年)が国府の長官である讃岐守を務め、崇徳上皇(1119～1164年)が晩年を過ごしたことで知られています。

国府は、都や国内の郡衙(ぐんが)との連絡が取れるように交通の要衝に設置される例が多く、讃岐国府も付近に官道の南海道(なんかいどう)が東西に通じ、瀬戸内海と綾川(あやがわ)を介して4kmで繋がるなど、陸・水上交通の接点となる場所に営まれていました。また、周辺に建立された讃岐国分寺・国分尼寺などとともに、讃岐国の中心となる地域を形成していました。

国府：国衙(こが)や国司の宿舎である国司館、市などが営まれた地区全体の総称

国衙：国庁や行政実務を行う曹司(そうし)などの諸施設の総称 国庁：政庁とも。国府の中枢となる施設で儀式や政務の場

丘陵のふもとに築かれた柱穴や溝

讃岐国府跡に係る調査は、平成 29 年度に開法寺東方地区の調査を終え、今年度から 3 か年の予定で国府の広がりや構造の解明に向けた周辺地域の調査を進めています。

今回の調査では、開法寺池南側の丘陵のふもとに築かれた柱穴や溝の存在が明らかになりました。

4・5 区では、等高線に沿って溝(溝 3・17)が掘り込まれています。これらの溝は平安時代初め頃(9 世紀)に埋まったようです。溝は南側から続く斜面の落ち際に設けられており、溝の北側には平坦面があります。平坦面は丘陵を加工して形成された蓋然性が高く、この平坦面に何らかの施設があるとすれば、溝は丘陵側から流入する水を排水するためのものであったと考えられます。

5 区では溝 17 が埋まった後、整地層の上位から平安時代終わり頃(10 世紀末～11 世紀前半)の柱穴(柱穴 12)が築かれています。柱穴 12 の底部近くには柱を支えるための礎盤石が据えられていました。柱跡が残っていないのは最終的に柱が抜き取られたためでしょう。通常、柱穴は複数で組み合せて建物などを構成します。今回の調査では柱穴 12 と同規模の柱穴は確認できていません。柱穴 12 に対応する柱穴は、調査地の外にあると考えられます。

4 区の溝 3 や 5 区の柱穴 12 の埋没後、平安時代末頃(11 世紀後半～12 世紀前半)に整地が行われています。この層に伴う明確な柱穴などは認められませんが、なんらかの土地利用は行われていたと推測されます。

